

「第29回住まいのリフォームコンクール」総評

まず、応募数については、東日本大震災の影響で、昨年の審査から7ヶ月強しか経っておらず、今年は応募数の減少を心配したが、例年並みの658件の応募があった。とくに応募数ゼロの県が少なくなった。これには、事務局や関係者の方々のご努力も大きいものと推測している。

今年の応募の特徴は、戸建とマンションの比率が従来とは異なることである。例年は戸建対マンションの比率は、7:3程度であったのに対し、今年は戸建の割合が78%と増え、相対的に共同建・連続建が22%と少なくなった。費用の点では、ほぼ例年並みであった。

震災では、「きずな」がキーワードになったように、震災を契機として高齢の親との同居を望む子供家族の二世帯化というケースが、今回特に目に付いた。被災地からの応募もあった。入賞できなかったのは残念であったが、リフォームによって前向きに迅速に生活を取り戻そうとする意欲が感じられ、心強く思った。

応募者の特徴として、地方ビルダーの台頭がある。これは昨年からの傾向であるが、本年もその様相がはっきり現れている。時代の流れのとらえ方、諸性能の向上努力は大手・中小とも変わらないが、地方ビルダーは、地域に根を張った地縁的アプローチ、個々の担当者の機動力（守備範囲が広くて、スピーディに作業が進められる）、それを許容する会社の包容力（時間的にもコスト的にも）、などが大きな特色であり、それが作品内容にも強く現れている。これにより顧客満足度は上がり、結果として、優秀作品への入賞が増えている。

全体的に見ると、本年はとびぬけて優秀という作品には出会えなかった。他方、性能に対する意識は年々高くなっている。以前は、総評において、性能に対する記述をするように求めたものであるが、今は、その必要も無いほど、耐震性能・断熱気密性能・マンションの床遮音性能・バリアフリー性能などについて、多くの作品が記述をしている。その分、性能記述だけでは、コンクールにおける差異は出なくなった。

そこで次の段階として、よりこなれた性能へのアプローチが審査のポイントになる。単に「高断熱高気密」を数値として売りにする作品だけでなく、それぞれの住戸の立地・構法・住み方に応じて「中性能程度で住みやすい」住環境の構築をしているものも評価するようにしている。特に長期優良住宅先導事業

は、リフォーム部門では比較的提案条件がゆるかったためか、自由な発想に基づいて大胆な提案をしているものが目についた。補助金を利用して工事費を軽減出来るメリットも生かしつつ、今後の報告あるいは計測義務などに、リフォームを仕掛けた側として継続して居住者をサポートしてほしいものである。

近年の、応募用紙でのレイアウト上の特徴は、パソコン編集による写真の多用である。本コンクールは写真コンテストの面も多分に持っている。見せたい箇所が多いのはわかるが、写真の配列が平板的になったり、細かい写真が多すぎて逆に見えにくくなっているものもある。狙いを絞った写真により主張点のはっきり示された方が納得しやすいものである。本コンクールでは、全体のバランスの良さだけでは、入賞は難しい。さすがプロ！と施主に言わしめるような、テーマを持ったリフォーム提案を見せていただきたい。

なお審査にあたっては、法令遵守のチェックを応募用紙から読み取れる範囲で行っているが、今年は法令チェックにより審査以前に脱落した作品が例年以上に多かった。これは、どんなにすばらしい作品であっても審査対象にはならず、応募者の努力がすべて無に帰することである。今年も多くの魅力的な作品が落選したことは残念であった。応募者は肝に銘じていただきたい。

本年も多くの方々のお力に支えられて、コンクールを行うことが出来たことを心から感謝します。

第29回住まいのリフォームコンクール審査委員会
委員長 上杉 啓



審査風景